

聖霊降臨後第2の主日礼拝

「キリストにある新たな人間関係」

詩編一三三編・ルカ8：19-21

(1)

ある日、郷里のナゼイから、母と兄弟たちとが、主イエスのところに訪れてきました。ところが、彼らは周りの群衆にさえぎられて近寄れません。ところが親切な人がいて、「あなたのお母さんと兄弟たちが来ています」と知らせてくれました。普通ならば、「親切に有難う・・・」とお礼を言ひたいです。

ところが、21節を見ますと、「わたしの母わたしの兄弟たちとは、神のことは聞いて行っ人たちです」「こを、口語訳は、「神のみ言葉を聞いて行っ者こそ、わたしの母わたしの兄弟なのである」と訳しました。何とも他人行儀なのです。それでも、あらためて、本来「家族とは何か」「血のつながりとは何か」を再考させられます。

9年前の3月11日に、東北地方に大地震が発生しました。家を失い、肉親を失い、家族がバラバラになり、体育館内をダンボールで間仕切りして、プライベートのない生活が長く続きました。ところが、次第と不思議な変化が起きました。互いに他人行儀であった者たちが、次第に物のやり取りがはじまったといひます。さらに、日本各地からの援助が届き、さらに、アジア・ヨーロッパからも救援の手が届きはじめます。それを知った者たちの間に、「いつしか」絆」といひ言葉が生ま

れました。その時、「遠くの親戚より、近くの他人」といひことに気づいたのです。

ところで、初代教会において、互いを呼び合う時、「兄弟」(アデルフォス)と呼び合う習慣がありました。タビテ・マーティン宣教師は、敗戦直後の日本に来て、実に良き働きをした方です。マーティンさんといえば、あの大きな身体、大きなブルーの目、しかも、大きな声で「結城兄弟！」と近づいては、大きな手を差し延べた印象深い宣教師でした。

新約聖書の手紙が12通ありますが、そこには、「兄弟たちよ」「わたしの愛し慕っている兄弟たちよ」といひ呼びかけを、たびたび目にします。「兄弟」といひ呼びかけは、新約聖書では100回、なかでも「使徒の働き」には50回も出てきます。

NHKのTVK「ファミリーヒストリー」といひ番組があります。「父」「母」「兄弟」「姉妹」「叔父」「伯母」さらに何世代にまでもさかのぼり、先祖のルーツを調べる興味深い番組があります。昔から「血は水より濃」「水は血にならない」と言われてきました。

血のつながりを有難く思っ時もあるれば、時に重苦しく思っ時もあります。今朝は、改めて「血のつながりとは何か」「肉親とは何か」を考えてみます。

(2)

先ほど詩編133編を拝読しました。

「見よ、兄弟が和合して共にあそぶのは、いかに麗しく楽しいことであらう。それはどうしよう

りませぬ。「テイク・アンド・ギブ」ではなく、むしろ、「ギブ・アンド・テイク」なのです。人から親切にされれば幸せを感じます。しかし、実は、幸せを感じているのは、親切にされたもののほうです。二倍にも三倍にもまなる喜びをいただいています。不思議なことです。

讚美歌121番の歌詞に、「すべてのものを与えしすえ、死の外なにもむくいられて、この人を見よ」とありますが、主イエスは、すべてを与えて、自らを犠牲とされたお方でありました。こうした常識では考えられない神の全き献身に触れた時、わたしたちの内に生まれたのが「兄弟愛」です。「テイク・アンド・ギブ」とは程遠い世界です。まして、相手の出方を見ながら生きていっては、互いの間に真の兄弟愛は生まれませぬ。

「進んで互いに尊敬し合いなさる」(ロマイ2:10)との勧めがあります。「進んで」とは、自分からです。相手の出方がどうこうではなく、自ら先じて一歩を踏み出してみよ。先じれば、多くは損をみると言います。しかし、それでもやはり、「進んで」で、自分から一歩を踏み出す、つまり、損得を考えない、計算しない、そうした生き方をなさったのは、我らの救い主・イエス・キリストではなかったでしょうか。

「主はわたしたちのためにいのちを捨ててくださいました。それによって、わたしたちは愛というごことを知りました。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨て

るべきではないか」(ヨハネ3:16)。この第一ヨハネ3章16節とヨハネ3章16節をセットにして心にとめてきました。

(3)
自分の母を母と見なし、同じ腹から生まれた兄弟を兄弟と見なすだけでいいのかと問われていると思われます。こうしたことは、普段それほど深く考えないかもしれませぬ。

しかし、旧約の民イスラエルが、何千年という歩みの中で、いかに、系譜や系図の純粋性を重視した民族かと思えます。教訓として、わたしたちに何を残しましたか。それは、「肉のままなるイスラエル」「血のつながり」「だわるイスラエル」では駄目だ、「霊のイスラエル」とならねばならないと強く諭されています。

主イエスは、「どうまで言われました」「わたしに従ってくることが願うものは、父・母・兄弟・姉妹を捨てて、わたしのものにならざるでなければ、わたしの弟子となることはできない」(ルカ14:26)。「捨てる」は、「憎む」でもあります。「自然のままなる人間関係」「肉なる人間関係」を見直す必要がある、それをカラカラボンして、「血筋にやらぬ」、肉の欲にもやらぬ。人の欲にもやらぬ」(ヨハネ1:13)、キリストにある新たな人間関係から見直す必要があるとの勧めです。

「わたしの母とは誰のことか。わたしの兄弟とは誰のことですか」と言われれば、わたしたちの意表をつく言葉がもしもせぬ。

はないでしょうか。

「アジジのフランシスは、こう祈りました。「愛されることを求めません、他を愛する人となれますように」「一、相手が愛してくねるなら、わたしも愛する、向こうが許してくねるなら、わたしも許すというではありません。自らが「先んじて」「進んで」「愛さねばなりません」。

主イエスは、こうも言われました。

「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、うるぎを投げ込むためにきたのである。わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとって、わたしに従ってこない者はわたしに、ふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者はそれを得るであろう」「一目の前がへらんでくるような庄倒される言葉です。あまりに厳しい言葉で、説教することをためらいます。わたしの家族は9人でした。

わたしの身内といえば、姉とわたしだけになりました。姉とは葬儀でもなければ、互いに会う機会はありません。にもかかわらず、わたしは少しも寂しくありません。親しく兄弟姉妹と呼び合える、身内にまざる多くの信仰の仲間がおられます。しかも、週ごとに会うのですから、身内にまざる親しい関係を与えられたことになりました。

肉の、自然の、血によるつながりを当然のこととしてきたわたしたちですが、そうした自然なる人間関係から、新たな人間関係に生きなさいとの勧めであります。

「こういつわけで、キリストもわたしたちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いを受け入れ、神の栄光をあらわすべきです」(ロマ15:13)との御言をかみしめたいと思えます。

【祈り】

天の父よ、肉による絆からキリストは解放してくださいました。今、兄弟姉妹と呼び合う神の家族とせられたことを感謝します。「兄弟が和合して共にいるのは、いかに麗しく楽しいことであろう。それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、アロンのひげに流れ、その衣のえりにまで流れ下るようだ」と願われたダビデの願い・祈りがわたしたちのものとなりますように。主イエス・キリストの名にあり祈ります。

「アーメン」